



かくともなく、集るともなく、
机上に一書あり。みな雪中庵
嵐雪のほくなり。ひとりこれ
を紐といて、まもりをる。ひ
るつかた、例の竹川訪ひ來り
て、たまへ、梓にきざまんと
いふ。さはまで、かうぶりし
て得させんとて、玄峰集とも
のし、うちくれぬ。

百萬坊旨原

かゝるもあつたもあつた
おとよ一書あり。あつた
嵐雪のわくあり。ひかりこれと
細いすりすり。あつた
例の竹川訪ひあり。あつた
梓にきざまんといふ。さは
まで、かうぶりし。あつた
て得させんとて、玄峰集とも
のし、うちくれぬ。

百萬坊青原

玄峰集春之部

改正

四海波魚のきゝ耳あけの春
元日や漸くうごくいかのぼり
元日やはれて雀のものがたり
年すでに明て達磨の尻目哉
面くの蜂をはらふや花の春
三ツの朝三夕暮を見はやさん
今朝春の奥孫もあり彦も有梢を富
若水に智恵の鏡を磨うよや
五十にて四谷を見たり花の春
あら玉の馬も泥障をおしむには
初空や鳥をのする牛の鞍
櫟の世阿彌祭りや青かつら
惟茂と起しに來たる二日かな

此句は陰月二日にあさあせ
しな、人の來て起せしにか

く申されしとかや。

寶ぶれ 詞書有愛に略

須磨明石見ぬ寐ごゝろや寶舟
夢明て浪のりぶねや泊瀬寺

む月はじめのめおといさかひ
な人々に笑はれ侍りて

よろこぶをみよやはつねの玉はゝ木

若菜七つがひを判する詞歌

七草を三べんうつた手首かな
ぬれ縁や薺こぼるゝ土ながら
霜は苦に雪に樂する若菜哉

憶翁之客中

裾折て英をつみしらん草枕
とゝははやすめは聲若しなつみ歌

春朝

都あけてくゝだち買ん朝まだき

風渡て石にすがれる薺かな

題しらす

ほつくと喰摘あらす夫婦哉

鶯

鶯にほうと息する山路かな

うぐひすや書院の雨戸はしる音

鶯をなぶらせはせじ村すゝめ

鶯の宿とこそ見れ小摺鉢

梅

むめ一輪一りんほどのあたゝかさ

此句ある集に冬之部二入たり

又おもしろきか

輪に結ぶ梅をぬけたる月夜哉

臥龍梅

白雲の龍をつゝむや梅の花

荏栢天神奉納

こぼれ梅かたじけなさのなみだ哉

北といふ一字題

手のゆかぬ背中を梅の木ぶり哉

梅ちるや齒のない馬に耻かしき

桐雨のぬし京うち参りとて出

ぬ。行かたの覺束なく、知る人ばそこ／＼にみちのほどは

かう／＼といひふくめて出し

たてつ。卯の花の雪消へ、五

月雨のくもらぬほどに歸り來

べきなれどいと名残おしくて

梅にさむる朝けわするな辛きも

翁の春もや、けしきとのふ

と申残されし句意を味へ侍り

て

この梅を遙に月のにほひかな

梅干じや見知つて居るか梅の花

椿

鋸のからき目見しを花つばき

柳

目前に杖つく驚や柳か妙

中納言藤房

於馬場殿龍馬に付て直諫を

奉られしが其言行末如し鏡

亂るべき風の柳をさすの神子

春の水に秋の木葉を柳鮭

題しらす

正月も廿日に成て雜煮かな

一鹽の聲さぞあらん南部雉

せはしなき身は瘦にけり作獨活

蔦のとうほうけて人の詠かな

狗脊の蘆にゑらるゝわらび哉

きさらぎや火燵のふちを枕もと

春風の石を引切わかれかな

此句は門人なにかしが旅立

けるに、蠟石をおくるとて

かく申されしと也

なんなにかはりて

なれも戀猫に伽羅焼てうかれけり

燕

簾に入て美人に馴るゝ燕かな

柳にはふかでのおのれ嵐の夕燕

蹄雁

順禮に打まじり行歸雁哉

箱根にて

かへる雁關とび越る勢なり

紙寓

糸つくる人と遊ぶや几巾

惜暫別

虚空を引とめめばやいかのぼり

蚊足が鄰かへたるに申つかは

しける

此夕べ軒端へだちぬいかのぼり

行脚惟然へ申おくり侍る

蛙合

木の枝にしばしかゝるや几巾

よしなしやさでの芥とゆく蛙

上野より歸り侍るとて

酒くさき人にからまる胡蝶かな

顯月

中川やほゝり込んでも臘月

我等今日聞佛音歡喜踊躍と

讀誦し奉りて

嬉しいか念佛おどりの柄杓ふり

出かはり

出かはりや幼心にものははれ

出かはりや其門に誰辰の市

接木

見たい物花もみぢより接穂かな

苗代

なはしろに老のちからや尻だすき

青精飯

桐柳民濃に茶飯かな

上巳

隣く雛見廻るゝ小家かな

うます女の雛かしづくぞ哀なる

鶯の來て染つらん艸の餅

沙干に

水草の馬刀かき寄ん筆の鞘

しほひくれて蟹が裾引なごり哉

桃

おのくの桃の席や等持院

桃の日や蟹は美人に笑はるゝ

華

あらおそや爪あがりなる花の山

白鳥の酒を吐らんはなのやま

花に風かろくきてふけ酒の泡

櫻川はほそくながれて青柳の

里一とかまへうちかすめり

膝木よる長女いやしや糸櫻

殿は狩妻餅うるさくら茶屋

手習の師を車座や花の兒

兼好の筵おりけり花ざかり

追ふ遙鵬鷗之間出入是非之境

花の夢此身をるすに置けるか

花はよも毛蟲にならじ家櫻

はなを出て松へしみ込霞かな

新發意が花折あとや山嵐

頼光山入之贊

なまぐさき風おとすなり山櫻

小町餐

我戀よ目も鼻もなき花の色

原の宿を通るに、勅使の歸京

ましますとて、海道も麗をは

らひ、山も殊更に耻かしげに、

けふを晴とつくりひたてり、

砌のすだれは上られたるに、

みぼうしの用意なんどきらき

らと見ゆ。おそくは未きか

ず、富士に雲井の客人を見る

人は仕合なる旅に参合たり。

富士を見ぬ歌人もあらん花の山

雲雪と仇名も言はじはなさかり

筆とるは硯やほしき兒ざくら

花片く、鞍にあたる舌の先

月花の其ひとふしや火吹竹

女中方尼前は花の先達か

大和廻りの東潮、めぐれく

風車、東風ふかば西へ行、に

し吹ばもどれ、前後奥す。猶

根は手形有り、大井は川越有

り、左右廣し。空吹く風の何

が吹やら。

逢坂は關の跡なりはなの雲

大井川船有ごとし花の旅

白つゝじまねくやうなり角槽

藤 詞書あり略す〔装遊稿〕

にあり

ふち浪に鶴は得たりいらこ崎

小奴吉齋に花を見せて

小坊主よ足なけかけん松に藤

立志追善

山ぶきのうつりて黄なる泉哉

ばせん翁は普化の師、晋子は
臨濟の懇子、三十年來は面
から竿をならして、他のつら
を出せるなし。末期に及で半
句を吐す。さらに遺跡を止め

ざるは、若夫それもしらす。
大悲院へ齋喰に行歟。

中院廻向

普化去りぬ匂ひ残りて花の雲

亡跡

菜の花や坊が灰まく果はみな

三七日

鶯や弓にとまりて法の聲

慕參

山ぶきの實を穴掘の鉄ひとつ

玄峰集 夏之部

夏衣

鹽魚の裏ほす日なり衣がえ
腸は野に捨てたれど拾かな
すよりする傍にうつくし白がさね

詞書あり略

老ひとつこれを荷にして夏衣

青藤

五位六位色こきまぜよ青すだれ

時鳥

行燈を月の夜にせんほととぎす
ほととぎす耻かき道具かたつけん

伊勢法樂

こゝろには松杉ばかり郭公
錦帳の鶉世を草の戸や蜀魂
たちばなを喰ひもつみもし時鳥

待乳山の社頭に雨をしのぎて

空は墨に畫龍のぞきぬ郭公
時鳥鳴や利休の落し穴
恒晋子が母

啼いりて音もなしそれは時鳥
ほととぎす旦夕。里さび燈うつ頃
御成筋いかなる筋をほととぎす

冠里公にて

ありがたやたととり山の郭公
時鳥聞は坐頭の根付かな
似た鳥を賣付けてゆけ時鳥

卯花

聲もなく兎うごきぬ花卯木

齋をまうく

橋賣あなうの花の飯を見る
川骨や撥に測める夜半樂
經の偈は連歌ときぬ時鳥

此三句は晋子追善の吟なり
とぞ

懷舊

からびたる秋なりけるを若楓

嶋田の宿に成僧なとふ

やすき瀬を人に教へよかきつばた

牡丹

古庭にあり来りたるぼたん哉

土嘗てはにかむ顔が牡丹かな

はつ経盛ならべたるぼたん哉

青嵐

青あらし定まる時や苗の色

義仲寺師父之廟

色としもなかりける哉青あらし

新樹

若葉ふく風やたばこの割よし

養鯉をほして新樹の烟かな

鎌倉鶴が岡

並松の行列ありし夏木立

こがれ海道にて

霧雨に木下闇の紙帳かな

ばせを菴にて

菴の夜もみじかく成ぬ少しづ、

うたゝ経の夢に見えたる鑑哉

晉子

其夢に戯る。

下部等に 經くはする日や佛

内外の神拜終りて猶璣の宮の

奥ふかく八十瀬をわたりぬ。

塵外五里の山陰にして森の雫

に舎殿破れ、寄生としなかさ

れて夜のあらしいふせげなる

にいとゝかみさびわたらせ給

ふ。

神ませばかつほもすみり山の奥

大勢の中へ一本かつをかな

熊野

養取たく爰でもお僧愚なり

南無大悲觀世音ほさつと露よ

くうたひ連たり

桑笑ゝや名とりの老女嬋達者

燕居もやうく見いだされて

このごろは新麥くるゝ友もあり

米花へ祝義つかはすとて

澤潟の花にくはへの銚子かな

筭

竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき

たけの子やかり麻の床の隅よりも

善光寺にてみる喚ける尼に

海松ふさやかゝれとてしも寺の尼

悼書流亡妻

物とに妻なき家の茄子づけ

蝸牛

白露や角に目をもつ蝸牛

坂本の宿にとまりたるに、櫓

木つみたる火たき屋の隅に、

具足と太刀の埃にまじりて待

りけるを持つたへたる、故や

あるとたづねれば、爰のな

らはしにてかばかりの兵具も

たぬ家は待らずと申ける。心

にくかりける。

なめくじり這て光るや古具足

天津の驛に出て

あちさいを五器に盛ばや草枕

天津の梅主、入集の句あまた

こされけるを舞案(庵)みだ

りがはしく失ひければ

漁父

あちさいやどこやら物のとたらず

照射

簀ほして朝くふるふ螢かな

端午

弓杖に歌よみ顔のともし哉

しだり尾の長屋く菖蒲哉

一刀見せんあやめの九節

あやめ草賀茂の假橋いま幾日

世のあやめ見すや菰の觸體

曾根太郎を登り曾根次郎を下る

片足は岩に放つてかぶとかな

粽一ふさ全阿袖にし來りれぶ

りかたむきたるに

粽もつ扱はうつゝの草むすび

文もなく口上もなし粽五把

標佩てわざとめかしや芝肴

印地

おもふ人にあたれ印地のそら礫

競馬 置袋

落たるがとに目立やあし揃

抜く顔添へ蠅

蠅はぢき怒る心よ手束弓

顔につく飯粒蠅にあたへけり

獨座

來るのみか裾から蠅の折ふしは

題しらす

それにさへ願ひ絶めや金の蛋

めづらしや唐の蚊、詩人を喰う

て梳のどし。珍らしやから

の蚊、美人の帳にこがれて、瘦

て柳に似たり。からの蚊く。

唐の蚊や終に枯たる藻鹽草

此句は唐紙に蚊を濡いたるに書れたるよし。

うち歎く事侍りて

哀れとより外には見えぬ蚊遣哉

蚊遣木や斧に女の石をうつ

旅童

萍の實もいさぎよし水驛

紀の山きの浦、海にり江に

入る。禹盆の水を捨て異物を

しるせる海外山表のありさま、

ルンカボチャなどいふ遠津

嶋根の人がらば書にのみ見た

り。目前に南のふびすの洞に

かくれいほに走るを、鬼に

もせよ人にもせよ、こゝろお

かるゝ旅麻也。

蛇いちご半弓提て夫婦つれ

和泉式部之石塔

本宮より一里彼式部の月のさ

はりて詠たる所といふ

蛸のさす其跡ながらなつかしき

維盛彌助

十津川近き湯のかはのほとり

也。除田百五十石、代かはり

家くだりたれど、さすがに今も平家也。

川骨の花 一時もさるほどに

やぶやぶ 文アリ

荊の花 裾さらしや旅ごろも

梶原屋しきを見る。此人はさばかり文筆には達せざれども、歌も詠、物の情もしれる人によ。折ふしの口ずさみもきこえとまりしな、にくきものひとつには、先此一族をいひふらしぬるは、いかなる宿統のつきたるにか。舊跡あはれに覺侍りて

むつかしき中に香もありばらの花

菜ヲ 莢

山茶莢のかざしや重きふじ風

瓜

兒の手の玉にもあまる眞桑哉

八幡太郎 登

御堂關白殿御忌に義家朝臣 參籠の時、南都より早瓜をた

てまつりしに、博士毒氣有よ

しな申。義家に仰て瓜を刺たるに毒氣則出。下篇

瓜切てさびぬ劔の光かな

氷花が妻うしなひたるにいたみとして遺す 説書有

なでし子は紅粉おしろいも散しすて常盤木のちるや母さへ其子さへ

うち籠るほど訪ひ侍りて

山鳥のほろく なきや五月雨

夜雨吟

五月雨や硯箱なる唐がらし

さみだれや蚯蚓の徹す鍋のそこ

時鳥の二聲三聲おとづれければ

五月雨の端居ふるき平家をうなりけり

亡母を夢見る

五月音に我袋蟲や母戀し

伏見榎木町

炬松ふつて野邊を行もげに爰

もとの古風なるべし

行燈で来る夜送る夜五月雨

明てのく家に伏見や夏の月

神菴むすび侍るとて

葦紫蘇にむすばぬ先の白露か

題しらす

鶯の音を入あやしニッぽし

早乙女にかへて取たる菜飯かな

三河風來寺

一もとのあふひを登る山路哉

打麥歌

蟬鳴や麥をうつ音三と三

六本木にて

下闇や地虫ながらの蟬の聲

あなかなし薦にとらるゝ蟬の聲

那智山

暑雲の外瀑に奪るゝ人の色

夏の日に頼き飴のもやし哉

おもだかのふとりすぎたる暑さ哉

江の嶋

夏の日やさめて痛のいなびかり

稻村が崎を過るに、木陰とも
なき砂のうへに漁父のこぞり
て、わかなごといいるものな
ありと侍る。

照付てひかりも暑し海の上

貝うる家の男のわらは、麥の
粉な盆子にもりて、かしら揃
えてうなめたるに水を乞て

蟹の子にたうとがらせん道明寺

長谷寺の前にて

飴賣の箱にさいたやゆりの花

能見堂

ふるく侍るといふ人あり

(この詞書、東湖の「渡鳥」
には脇書となり居れり。)

汗ぬぐひ小松に干て沖津風

雪の下に泊り侍りしに、蚊や
りたきたてけふたかりければ、
みたらしのふちにむしろ敷て

川芎のたまさか匂ふ茂り哉

藤澤を出行、民家の門に木有。
根は土を抜あがりて五尺ばかり

りも高く、左右にひろがり、
元木たくましく肥て、末葉も
つたて、蟬の聲をもて鼻に
かへたるさまして遺出たり。
西行のもどり松とかや申侍る。
越路松島のかたにもかゝる名
のきこへ侍る故はしらず。

童わらわにあふぎとらせん松の陰

納涼

犬に逃犬を追ふ夜のすゞみ哉

水車のしづくをうけて

すゞしさや心手へとる水の色

かはらの涼

來る水の行々水洗ふすゞみ哉

埋火を涼とあふぐ夜のかな

一種貧賤にとて皆ゆく中にな
じはり侍りて

味噌するにすゞ數瓢かずの游哉

祇園の會の七日の鈴、十四日
の山、綾より錦より見ものな
るは、萩野いがらし松尾まつ

むら、素袍に太刀はきて四條
高倉の辻に床几どしを居れば、下
の雜式おなじさまにて、紅の
總さげたる鐵棒かいこみ、か
ちんの上下着たる男等、黒漆
の棒てに手に持て粧をつくら
ひ、非常ないましむ。兼て定
められたる一二の圖を改めか
へす。威儀嚴重なる中に、は
しごと白と車に續て、町どに
引は何の用にか侍りけん。

たて白もともに踊や祇園の會

移徙の祝義に

とこなつの家にいれたる徳利哉

逢恨戀

我戀や口もすはれぬ青鬼灯

竹姫はなれて抱よけれど人
やれたまん涼しくて一人れん
には

汗に朽ば風すゞべし竹橋袴
ちんじやうの和巾さばきや汗拭

清水 詞書あり略

抜たりなあはれ清水の片草鞋

目黒の瀧も人のまふでぬ日

底しみづ心の塵ぞしづみつゝ

序令沾洲ちなみ侍りて、京よ

り大和路かけて和歌の道たづ

ねんと出立けるな、跡おしみ

神奈川の岱(墓)の清水に先を進め

紀伊野中の清水、播州に同名有

すみかねて道まで出るか山清水

柴の菴

夕だちや障子かけたる片びさし

題しらす

すぐろだつ羽黒のきどす夏尾花

夏畑に折くうごく岡穂哉

(東潮の「渡島」に「やつ」

を廻るに、五月雨も降す、

てりに照る日に、青さとい

ふ藻府を田の畔につみて、

雨なこふ鼓の音をぼろく

と聞ゆ」とありてこの句を

記せり。嵐雪紀行の披露な

り。

切味嚙のひなた臭さや夏泊り

芭蕉の墓まいりのつゐで義仲

菴へ参侍りけるに庵主出奔せ

られければ

住持まで拂ひ果けり夏の空

御敵

今日の日ば東北の隅より出て

西北の間におさまる。長日短

夜の頂上なりとて、此國の法

しれる家くには、とさら

に日の神を祭り侍るとかや。

青海のおもても限りなく覺

て、尤敵すべき砌なるべし。

いくばくの溜息つきて夏はらひ

なつはらひ目の行かたや淡路島



夕暮の集梅と部

初秋

閑居

秋風の心うごきぬ繩すだれ

つくり木の糸をゆるすや秋の風

洛外の辻堂いくつあきのかぜ

葛

瘦る身をさするに似たり秋の風

齒のあとのあり葛の葉のうら表

宗祇之廟

石塔をなでゝは休む一葉かな

市中

盆迄は秋なき門の灯籠かな

七夕

眞夜半やふりかはりたる天の川

ほし合に我妹かさん待女郎

ほし合や替女も願ひの糸とらん

大伽藍造替まし／＼ける年の

今日、遠くおがみ侍けるに、

富士筑波根の間に更に山ひと

つ出来たるかと、空のにほひ

もちかく成べきほどなりけり。

(元祿十年東叡山の根本中

堂建立の時也)

上野より道や付らん銀河

瀧飛のけろりと浮や星使

名月の夜はいかならんばかり

がたし

七夕は降と思ふがうき世かな

七夕や賀茂川わたる牛車

防鴨河使

妻越や人目づゝみの河づかひ

梶の葉に小うたかくとて

我や來ぬひと夜よし原天の川

年渡りえや隅田川原の橋柱

さもあらば有れ句を洗ふ天の川

飛鳥井なんぼどの、蹴鞠、い

けの坊の立花、みやこの田夫、

いなかの風流、立て見るあり

居て見るあり。

秋風のうしろを覗く立花哉

薄

の、宮にまいりて

嵯峨中の淋しさくゝる薄かな

花すゝき階子つれなくこけかゝり

品川へ二里の休や花すゝき

野の華

おもしろく富士にすじかふ花野哉

花の秋草に喰あく野馬かな

盃のそばを切題にして一字を

探うる。(うは衍か)

くゝらせて色くゝにこそ秋の露

蟲

寺にて

常燈や壁あたゝかにきりくゝす

簑蟲の音をきゝに來よ草の薙

芭蕉翁

聞にゆきて

何も音もなし稻うちくふて蟲哉

茶碗銘

黒茶碗あり。花の朝はます

くゝろく、雪の夕はいよ

くゝ黒し。月待宵のやみをさ

ぐり、閑夜に鼻をとられしは、

おのくつちめくらのまじは

りなるべし。

檢校 貧僧 大黒 小ぐる

はちの子 早ふね 小雲雀

三代目なのんこといふ。のむ
ここそ猶ふかき意味あれ。祕
してしばらく残す。

松むしのりんともいはず黒茶碗

底倉木香(賀)あしの湯を經て

地獄めぐりといふとあり。惣

じて此邊の濕化、蝶蜻の類盡

なぬりたるがごとし。

おのれさへ餓鬼に似たるよきりくす

露

草の葉を遊びありけよ露の玉

十歳に成ける童の身まかりけ

るに

駒取りのもとの雫や末の露

うすひ權現にて

いなづまにけしからぬ神子が目ざしやな

鶏頭

まだ夏の心ならひや葉鶏頭

味噌で煮て喰ふとはしらじ鶏頭花

鶏頭は蟹のたきさす煙かな

西瓜

身ひとつをもてあつかへる西瓜哉

妻障

尸かな桔梗かるかやおみなへし

蓮の骨あはれは美女の尸哉

朝曳をとぶらふ

蓮の實の飛はとびしがそもされば

同一周忌

青ふくべひとり廻つて一周忌

里右が娘うしなひたるに遣す

鬼灯のさすればつづす歎哉

盆會

魂棚は露も涙もあぶらかな

魂祭母屋の妻戸の音は何

喰ものも皆水くさし魂祭

たま棚や皆こまふと茄子あへ

詞書有略(「装遊稿」にあり。)

たま祭り爰が願のみやこなり

九日の六道まいり、小野のた

かむらの冥途にかよへる道な

りとして洛中の貴賤まふで、旗

の葉をもとめて魂をむかふる
印とし侍る

打ばひよく物としりつゝむかへ鐘

靈棚の栗にさきだついの字哉

あかれや美濃やと聞えたる、

なき名のながれとゞまる所は、

千日寺の蓬生の露ときへかふ

りぬ。盆のこのころは夜ごとに

群集して、逆縁にとぶらふ人

もあまた侍りけり。改名風雪

月照と石の塔婆に彫入たり、

あるまじきとなられど、おり

からは思ひかけずおほえ侍り

ければ

夢によく似たる夢哉墓参り

松が崎妙法の火

經を焼く火のたうとさや秋の風

大文字の句をもとめれば雪

のころの出けるまゝに

山の端を雪にも見ばや大文字

相撰

角力とり並ぶや秋のから錦

千本を南へよつつかの邊りへ
行とて

嶋原の外もそむるや藍嶋
戻りにも賣えずに鳩の草鞋哉

蘭鮑同聲

盜たる蘭や乞食の簞の下

秋暮

立出てうしろ歩や秋のくれ
もどかしく吾面くはす秋の暮
寐て起て又寐て見ても秋の暮
秋の暮石山寺の鐘のそば

定家

舟炙るとま屋の秋の夕かな

單誓上人之岩室

燕のかへりみちありほらの雨

江之嶋

日を拜む海士のふるへや初あらし
江の島の穴をうなるや秋の夢

鶴が岡の放生會拜みにとて待
宵の月かけて雪の下のやどりに
侍り。試樂の笛に夜すがら
うかれぬ。明れば朝霧の木の
間たへく、樂人鳥のごと
くつらなり社僧雲に似てたな
びき出る。神のみゆきの嚴重
なるに、階下塵しづまり松の
嵐も聲をとめぬ。

烏帽子着て白きもの皆小田の雁

月

名月や柳の枝を空へ吹く

名月や烟這ゆく水のうへ

旅泊

錢矢立空に三五とよぶ聲を

仕合な組の松かなけふの月

青空に松を書たりけふの月

花折新發意に戸ばそを扣て、

茶飯の狼藉をする一客有。

〔花折新發意〕は狂言の名也。

名月は蜂もおよばぬ梢かな

明月や先蓋取りて蕎麥を駛
海も山も坊主にしたりけふの月
清涼紫宸のあらたにつくりみ
がゐたる中に

新月や内侍所の棟の草

名月や歌人に髭のながごと

青鷺の叱と鳴つゝけふの月

名月の團友坊は男かな

土臭き鱧にはあらずけふの月

ひたちの鮭、かまくらのかつ

ほ、松江の鱸、わたらぬ雁

に組板をならし、遠き海の珍

物ちかき江のひれもの、心に

おもへばよだれに流れ、さも

あれしもの名月ながめ得たり。

獻くは嘶ですみぬけふの月
名月は絶たる瀧のひかり哉

詞書あり略〔塔澤記〕にあり。

早雲寺名月の雲はやきなり

鎌倉大佛

明月は南を得たり 佛頂珠
名月やたしかに渡る鶴の聲
高笑ひ月見る人に見さけたり

けふ長崎の泥足、めづらしき
顔もて目なれぬうつは物をお
くり侍るに

新月の心ばえなり 唐煙筒
明月や道心の名のおもしろき
聲とは外よりしらぬ月見哉

詞書有略 (装遊稿にあり)

野に寐たる牛の黒さを秋の月
とこぶしは宵の小貝か磯の月

信濃備馬樂

君來すばねこにせん信濃の眞そば
初眞蕎麥

新酒

我しもらじ新酒は人の醒やすき

題しらす

はぜ釣や水村山廓酒旗、風
あしの穂やおやちと呼ぶは渡し守

木犀の晝は醒たる香爐かな
八九月風やいづこのほらの貝
穗に出て世の中は田も囁もなし

(この句は渭北が奥州行脚
の戯別なりと云。)

水音も 鮎さびけりな山里は

柿栗

ひとり旅しふ柿くふた顔は誰

詞書有略 (塔澤記にあり)

猶石にしふ柿をぬる翁かな
穂粟や手にさゝけたる法の場

秋のくれ井手の蛙のからを見ん

舟竹

といふて土産にだらけける

に、人丸の柿の實、山の邊の栗
のから、けふの得ものゝあま

りなりと笑興じて

標茅 概のからよし野々山の木の實見よ

林間に養焼する日をたゞたのめ

くち木となおほしめされそ 楓茸

菊

初菊やほじろの頬の白きほど
指に入る風はや寒しけふの菊
蒼浪にのぞみたえけり菊の岸
一くねりくねるにもこそ菊の水

菊九章

其一 九日

菊もまだつゆ／＼つばむ九日哉

其二 素堂亭にて人々菊見

られるに

かくれ家やよめ茶の中に交る菊

其三 百菊を揃けるに

黄菊白菊其外の名はなくも哉

其四 名所の菊

白ぎくの鎌倉やすまば扇が谷

其五

菖のたけのみやびや

かなるは歌のすがた

也けらし。菊を見て

句なまふく。

鶴の聲菊七尺のながめかな

其六 琴

琴は語る菊はうなづく離かな

其七 茶

菊買ふは又茶にまけし人やらん

其八 書

書を抽芭蕉にねぶれ菊の兒

其九 畫

菊さけり蝶來て遊べ繪の具皿

京よりから崎へ詣るとしてが
の山越はするとなり

志賀越とありし被や菊の花

舂にてをのれと覺ぬきくの畫

霜の菊杖がなければおきふしも

繪の菊に今朝は餓たる胡蝶哉

蜂はさし蝶はねぶるや菊の華

瀧下圓哲に燕え

きくの香にさすが山路の雪踏哉
山路ふるこゝちや菊に懷たけ

きく添ふやまた重箱に鮭の魚

さればこそひなの拍子のおなるかな

神田祭のつゞみうつ音 蚊足

ひやうしさへあづまなりとや

花すゝき大名衆をまつりかな

詞書有略(塔澤記)にあり。

袖つまにもつれし雲や露時雨

まつ風の里は靱するしぐれ哉

孤林紅葉

牛まれに茶道をかくす艶かな

莊子枏木の太さ牛をかく

す。紅葉の醒さめを一ぶく

とかや。化されけんと放散

逍遙のたはむれ事なり。

ちり行も二度の情や梅紅葉

去かたへまいりて

萬の葉やつたの身ながらかゝる時

病床に虱をとる辨

しらす身の毛いよだちて、襟の

程うざ／＼としつるが、飯つづ

の半したる物さすりあてたり。

疾くものゝ上に赦しはなち、め

がね二重に疊て、渠がさまを窺

ひ見るに、白き肉黒き腸、呼吸

につれて動揺ゆるぐ。眼きらき

らと見すへ、手足よつか六つか

ありて怒けなるが、護摩堂にま

します明王尊に似たり。虎にも

戦ひ、龍とも争ふべし。誠や必

死の人の床には、かいふり戻り

てあさむきにらむ、とこそ本艸

には見へたれ。いまだ死まじき

にや、しり終ひ(に)むけて行。

恐ろしとみればこそさも覺ゆれ。

おのれが姿の、なべての虫にお

とれるものは。歌うたはぬは

聲のなければなり。今少身から
がらば、待宵のふるまひもしか
ねやはすべきを、糞虫にゆかり
たる鬼の子なればか、かく世に
うとみ果られたる業生のほどこ
そいと拙けれ。臭穢の中に質を
請て、揮に潜り、ぬひめにかく
れて、人の血氣を犯し吸ふと、
蚊子の鐵牛を噛むより猶甚し。
その生涯の終れる所は、火とり
の中に細きけぶりと飛び木枕の
角にからき耻をばさらされぬ。
されば真如の性のみてる事や。
摩竭なにとかいへる魚の大百由
旬より、蟻ミミの微細なるまで行
わたりて、憎愛かはる事なしと
こそ見ゆれ。内裏にもの祈ける
ひじりの御灯の光に、一夜しら
み拾はれたるに、物の化けのこと

治りけるとぞ。知識の肌はだに馴ま
とひて、徳をおなじういはれけ
るも、さるべき因縁にや。枉かたがの
穴に生をたくはへて、舊年の怨
人には報ふとも、さもあれさつ
（這奴）いかにゆるしてんと、か
たなひねくり鎗とりしごとく迄い
ちちおもふ間に、ころ／＼とこ
ろけて見へず。こはもらしつる
はと騒て、あなぐり求めどなし。
淵に物落せし人の顔して、手打
はたきてより、夢もしらみにし
らみ、東雲の空もしらみはてぬ。
白身坊が衣被けしものか。
あさがほの花ほど口をあくび哉

玄峰集

冬之部

讃大黒
神の留主能く女房を守るべし

十月、蟻

きり／＼す鼠の巢にて鳴終りぬ

果

木がらしに栢の柿の名残かな

前川亭にて

木がらしのわづかにまねく庭木哉

芭蕉翁回郷

風の吹ゆくうしろすがたかな

一葉ちりいくらもちりて月夜哉

時雨

茶を煎て時雨あまたに聞なさん

深谷やしきる時雨の音もなし

山茶花

いさはやの葉やあは雪も消がてに

延喜帝

寒夜に國土の民どもが寒から
んと夜のおとにて御衣をぬ
がせ給ひけるとなり

脱たまふ御衣は天下の衾かな

京にて

ふとん着て寐たる姿や東山
足袋はきて寐る夜隔そ女房共

爐

爐びらきの日をしめじ野々土菜哉

法華を聞待りて

沈著世樂無有慧心

つとめよと親もあたらぬ火爐哉

冬の日客をもてなす

君見よや我手いるゝぞ葦の桶
たまゝに引人の有赤大根

午といふ一字題

萱原や枯かけろひて馬の陰囊

水鳥

鈴鴨の聲ふり渡る月寒し

萍に何を喰やらいけのかも

汀水

鴨おりて水まで歩む氷かな

題夷講

鰯汁をついて巖に落るなる

霜朝の嵐やつゝむ生姜味噌

十月廿五日共ニ桃隣田ニ武江ニ

而暨ニ義仲寺ニ望ニ芭蕉翁之墓ニ

歎唱。

上略

霜月七日のゆふづくよの程に

義仲寺の冢上にひさまづく。

空華散じ水月うちこぼす時、

心鏡一塵をひかされば万象よく

くうつる。此節この道におゐ

てみづからを利し他を利して

終に其神不竭。今も見給へ

今も聞給へとて

此下にかくねむるらん雪ぼとけ

十月廿二日夜

十月を夢かとはかりさくらばな

四七日 題ニ翁ニ物ニ

木がらしの猿も馴染か簀と笠

十一月十二月初月忌

泣中に寒菊ひとり耐へたり

元祿ニ癸十月十二日一周忌

夢人の裾を掴めば納豆哉

七回忌

霜時雨それもむかしや坐興菴

十三回

品々ノの蒲團にのぼる木魚哉

歸依法 肉邊の菜を喰ふ

鯉のやうに腹を立するあけ鉄哉

海鼠

海鼠喰ふはきたないものかお僧達

海鼠だゝみもむつかしき世や獨住

鯛を得て返事に

たまはるは石花^{いしはな}にかしこしひねり文

神樂

かぐら舟^{ふね}濡^ぬの灯^{あかり}の御火白くたけ

雪

門の雪曰とたらひのすがたかな
竹の雪百歩の馬屋見すかせり
蛇もせよ木兎もせよゆきの猫
初雪や裾へとどかぬ白丁花

御樂地のうちをおがみ待りけ

るに、如意が獄より出る月の、

南門にかゝりてかぎりなくめ

でたかりければ

から花に月雪こぼすとびら哉
菓子盆やそもそめいろの雪ならば
澤菴の若衆せまりや雪のふみ
藏ありと知たる雪の光かな

今の嶋田よし助が門も見すて

がたくて

鍛冶の火も殊さらにこそ笠の雪

明星は乞食も見るか雪のうへ

雪中に雪を投込^なあそび哉

雪はまうさす先^{さき}紫の筑波山

此雪にむかひにおこす人も人

霰

武士の足で米とぐあられかな

顔出してはづみをうけん玉霰

鉢たゝき

今少し年より見たし鉢扣

薔 簀

畑中によし野靜やすゝ拂

歳 暮

山伏の見どに出立師走かな

古足袋の四十に足をふみ込ぬ

東潮が子もてるに申遣す

つき立の餅に赤子や年の暮

おもへばや泣れ笑はれとしの暮

とし一夜輾^{うすしり}残さじ日の鼠
又汁粉さまで浮世にあかねども

はせな菴の芭蕉もいまだうい

くしかりける秋、桐の葉の

一葉とへと告^つこし給へる事な

んどおもひ出られ侍りて

錢ほしとよむ人ゆかし年の暮

三盒子^{さんごし}とたらはすや年の暮

古曆ほしき人には参らせん

岡見すと妹つくろひぬこへ^この門

五十ばかりの古猫の鼠もとら

すなりて、常にいろりに鼻さ

しくべて冬こもりたり。なま

じいに雨泉の刀なのがれたる

を身の幸にして、今年も暮ぬ。

いづれもの猫なで聲にとしの暮

軒の柗梅を探るにおぼつかなし

豆をさへ聞ぬ藁屋にこれや此

此句は家をやきたる年、小

屋の住居のわびしきに、眼
なさへやみての吟なるよし。

辭世

一葉ちる咄はな一葉ちる風のうへ

蕎麥うちて眉髭白し年の暮
猿猴のてに手をかるやとしのくれ

出 肯寛延三庚午正月

百萬肯原校訂

東都書肆

日本橋通三町目

竹川藤兵衛板